

# 國學院大學學術情報リポジトリ

『ウェールズ案内』を読み直す：  
著者ギラルドゥスの執筆意図とかかわらせて(I)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永井, 一郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000998">https://doi.org/10.57529/00000998</a>

# 『ウェールズ案内』を読み直す－著者ギラルドゥスの執筆意図とかかわらせて（Ⅰ）

■ 永 井 一 郎

## ▶ 要 約

ギラルドゥス・カンブレンシスは『ウェールズ案内（Descriptio Kambriae）』の序文で、人々に知られていないウェールズ・ウェールズ人について紹介すると述べている。確かに中核部分は地誌にふさわしい内容となっている。しかし、これと並行して同書には性格の違う記述も多く含まれており、単純な地誌の書ではない。内容から判断して、彼は複数の執筆意図をもっていたと想定するのが自然である。

本稿で私は、まず、地誌以外の執筆意図をギラルドゥス自身の記述から、また、同書を構想した時点で彼が直面していた問題から推定し、次に、そうした意図が『ウェールズ案内』でどのように具体化されているか検討した。

検討の結果、ギラルドゥスが3種類の意図を同書に組み込んでいることが明らかになった。第1はウェールズの地誌の紹介である。第2に彼は、ギルダスにならってウェールズ人の過去と現在を批判的にとらえ、そこから将来への警告、提言を導き出している。第3に彼は、イングランド王宮のウェールズ征服計画に役立つ情報や論拠を提供することも意図していた。

このように性格を異にする執筆意図が組み合わされていることを念頭に置いて『ウェールズ案内』を読み直すと、記された個別事項について新しい理解が可能となる。

## ▶ キーワード

『ウェールズ案内』 ギラルドゥス・カンブレンシス 12世紀後半のウェールズ ヘンリ二世のウェールズ征服計画 「ケルト辺境」

- I はじめに
- II 執筆意図の確認（Ⅰ）
- III 執筆意図の確認（Ⅱ）（以上、本号）
- IV 内容の整理（Ⅰ）（以下、第65巻2号）
- V 内容の整理（Ⅱ）
- VI おわりに

## I はじめに

---

『ウェールズ案内 (Descriptio Kambriae)』は中世ウェールズを代表する文筆家ギラルドゥス・カンブレンシス (Giraldus Cambrensis, 本名 Giraldus de Barri) が1194年に発表したウェールズ地誌で、彼の代表作と評されている<sup>(1)</sup>。

本稿では、この著作に記された多様な事項を彼の執筆意図に沿って再構成し、その新しい枠組みの中で各事項がどのような意味をもつか検討したいと考えている。また、検討結果は、私がここ数年間考え続けている問題、すなわち、ギラルドゥスは『ウェールズ案内』の末尾3章(第2巻第8章~10章)でなぜ矛盾含みの記述をしたのかという問題を解く手がかりを与えてくれるのではないかと期待している<sup>(2)</sup>。

このような本稿の目的について、『ウェールズ案内』を知る人々は、いまさらギラルドゥスの執筆意図を問題にする必要があるのか、必要だとしても、同書全体を読み直すのがよい方法なのかといった疑問をもつかもしれない。ギラルドゥスの執筆意図は同書のタイトルから明らかであり、また、序文の中で彼は、ウェールズとウェールズ人の興味深い特徴を外部の人々に知らせるために書いたと明言している<sup>(3)</sup>。内容、構成ともにウェールズ地誌にふさわしく、記述に沿って読み進めれば理解に苦しむこともない。こうした感想をもつ人がいても不思議ではない。

実は私もこの著作を読み始めてからしばらくの間は、ギラルドゥスが明記している執筆意図を素直に受け止めて読み解こうとしていた。しかし、ギラルドゥスについて考え続けるうちに、彼が『ウェールズ案内』執筆時に直面していた問題や状況について多少とも推定できるようになり、これとかがかわらせて同書を読むと、彼の執筆意図は予想以上に複雑であることが分かってきた。表面に掲げられたものとは別に、必ずしも明示的ではない、あるいは、むしろ隠された意図が同書に込められている可能性が高くなったのである<sup>(4)</sup>。例えば、これまでは彼の偏見や誇張癖に由来するとされてきた一見非常識な記述が、彼自身にとってはむしろ、彼が想定した読者にとっても特別の意味をもってたと推定できるようになった。これは、『ウェールズ案内』を読解する場合、あるいは、その記述を部分的に史料として利用する場合に無視できない新しい状況である。

本稿は以上のような観点ないし期待をもって『ウェールズ案内』を読み直すのであるが、その作業は以下の手順で進められる。

まず前提的な作業として、ギラルドゥスが『ウェールズ案内』を構想し、執筆した時期にどのような問題に直面していたか検討し、そこから他者、とくにイングランド王宮やウ

ウェールズ人支配者たちにどのようなメッセージを発したいと考えていたか推定する必要がある。ただし、この点の検討は先行拙稿で済んでおり<sup>(5)</sup>、本稿はその結論だけを第2、第3節で利用する。

次の作業は、『ウェールズ案内』に明示ないし暗示されている執筆意図の検討である。これも第2、第3節で行う。同書は間違いなく地誌であり、この意図は改めて確認するまでもない。しかし、それだけではなく、ギラルドゥスは地誌の紹介を超えた現実的な意図をも込めて筆を進めていた可能性が高い。そうした、いわば隠された意図を探ることがこれら2節の中心的作業となる。

続く作業は、第2、第3節で推定した執筆意図を具体的に表現している記述の探索である。『ウェールズ案内』に記された多くの事項の中から、執筆意図ごとに関連事項を選び出し、再構成してみるのである。この作業は第4、第5節で行う。

なお、ここで検討対象となるのは第2巻第8章～第10章を除く本文である。この末尾3章を除外するのは、上記のように、本稿の目的の中にギラルドゥスがなぜこの部分で矛盾した議論を展開しているのか、その理由を探ることが含まれているからである。第8～第10章は本稿が説明すべき対象であって、論拠として利用すべきではない。他の本文から得られる結論とこれら3章が内容上、また、論理構成上うまくつながるかどうかが確かめてみたい。

最後に第6節で、前節までの推定結果を踏まえると『ウェールズ案内』の全体構成について新しくどのようなことが言えるのか、検討してみる。ただし、検討とはいっても、僅かな手掛かりしかないので、むしろ疑問提起に終わる可能性が高い。

以下本節では、次節以降の議論の準備作業として3つの点、すなわち、『ウェールズ案内』の史料状況、本稿に関連するギラルドゥスの他の著作、および、本稿に関連する先行拙稿について紹介する。

『ウェールズ案内』の史料状況はバートレット (Bartlett, R.) に従って紹介する<sup>(6)</sup>。

19世紀に『ギラルドゥス・カンブレシス著作集 (Opera Giraldi Cambrensis)』が編纂された際、その中心的編纂者・校訂者となったディモック (Dimock, J. E.) は『ウェールズ案内』のマニュスクリプトを2つの版に分類し、これが今日でも一般に受け入れられている<sup>(7)</sup>。第1版は1194年ころ、第2版は1215年ころにいずれもギラルドゥスによって作られ、それぞれ時のカンタベリー大司教ウォルター (Walter, H.) とラングトン (Langton, S.) に献呈された<sup>(8)</sup>。

第1版のマニュスクリプトで15世紀以前に作られたものが現在3点残されている。MS. Cotton, Vitellius C. x (14世紀), MS. Cotton, Nero D. viii (15世紀), Bib. Reg.

Royal 13, C. iii (15世紀)で、いずれも大英図書館蔵である。作成年代からわかるように、3点ともオリジナルではない。第2版のマニュスクリプトで15世紀以前のは2点現存している。ウェールズ国立図書館所蔵のMS. 3024 (13あるいは14世紀)と大英図書館のMS. Cotton, Dormitian, AI (13世紀)である。第2版のマニュスクリプトはギラルドゥスの生存時期に近いが、いずれもオリジナルではないと判定されている<sup>(9)</sup>。

なお、『ウェールズ案内』はギラルドゥスの著作の中で最も多くマニュスクリプトが残されている。15世紀以前に作成されたものは上記の5点であるが、16、17世紀に作成されたものが少なくとも16点現存している<sup>(10)</sup>。ただし、16世紀以降の写本作成は、イングランドに「辺境ウェールズ」のイメージを再度確認する動きが生まれる中で『ウェールズ案内』の記述が利用されたことを示しており、必ずしも文筆家ギラルドゥスの力量が評価されたからではない。

現在の研究者が利用している校本は上記のギラルドゥス著作集第6巻に収録されているもので、校訂者はディモックである。彼は底本としてMS. Cotton, Domitian, AIを選び、加えて他のマニュスクリプトに見られる相違点を異文として注記した<sup>(11)</sup>。注意深く異文を拾い上げて本文と読み合わせれば、底本以外の古いマニュスクリプトの内容もわかる構成になっている。『ウェールズ案内』の代表的な英訳書を刊行したソープ(Thorpe, L.)もディモックの校本に従って訳し、重要な異文を付録と註のなかで紹介している<sup>(12)</sup>。本稿はラテン語原文についてはディモックの校訂を、訳についてはソープの英訳を利用する。各マニュスクリプトにまでさかのぼって読み解く能力や機会をもたない私には、これが最も便宜、かつ、確実な方法である。

しかし、この方法をとると2つ問題が生じる。ともにディモック、ソープが第2版を底本としていることに根ざす問題である。

まず、本稿にとって第1版、第2版のいずれを検討対象にするのがよいか決める必要がある。一般的に言って、筆者自身が初版と改訂版を出している場合には、後者のほうが筆者の考えをよく反映していると判断してよい。初版を自ら読み直す中で説明不足の部分や訂正すべき箇所を発見し、改訂を決意することが多いからである。しかし、改訂はこうした場合以外にも行われる。たとえば、著者が状況の変化に応じて初版の内容を変える必要があると判断した場合である。こうした場合には、初版、改訂版はそれぞれ独自の史料価値をもつ。両者を細かく比較検討することによって、著者がなぜ、どのように考えを改めたのか推測できるからである。『ウェールズ案内』の改定は後者のケースである。ギラルドゥスは、第1版の構想・執筆時から第2版発表時までの間に、そのキャリア・デザイン、さらには、イングランド王宮に対するスタンスを大きく変えた可能性が高い<sup>(13)</sup>。

このように判断したうえで、本稿は初版のみを検討対象とする。2つの版がともに重要

な場合には、まず初版を取り上げるのが自然であろう。初版の内容をその構想・執筆時にギラルドゥスが抱えていた問題とかかわらせて検討するのである<sup>(14)</sup>。

検討対象を第1版に限定すると、次に、第2版マニュスクリプトを底本としているディモックの校本から第1版の内容をどのように確認するかという問題が生じる。最も確実な方法は、ディモックの校本に注記されている異文の中で第1版マニュスクリプトに帰属するものをひとつひとつ選び出し、これを校本本文の当該部分に差し替え、ないし、追加することである。しかし、本稿ではより簡便な方法をとる。それは、ソープが英訳本の付録の中であげている第1版と第2版の異同表を手掛かりとして第1版の内容を確認する方法である。彼の紹介に従えば、第2版には12の追加とひとつの削除がなされている<sup>(15)</sup>。本稿はソープの英訳本からこれら12箇所については削除し、1箇所は復元することによって第1版の本文を全体として、ただし、英訳で、確認する。ラテン語原文にまでさかのぼって確認しないと細かい表現の理解について誤解が生じる可能性があるが、パラグラフ・レベルで内容を検討する場合には、第2版で削除された文章を除き、大きな問題にならないと判断した<sup>(16)</sup>。

本稿は検討対象を『ウェールズ案内』に限定しているが、同書は決して孤立した作品ではなく、先行する3つの著作、すなわち、『アイルランド地誌 (Topographia Hibernica)』、『アイルランド征服 (Expugnatio Hibernica)』、『ウェールズ旅行記 (Itinerarium Cambriae)』とともにひとつのグループをなしている。この点は、ギラルドゥス自身がいわゆるケルト辺境地域について他地域の人々に紹介する構想を立て、これに従って4つの著作を発表したと述べているので、間違いない<sup>(17)</sup>。したがって、これら3著作に『ウェールズ案内』の内容や執筆意図を理解する重要な手掛かりが含まれている可能性は高い。そこで、3著作それぞれについて簡単に紹介しておこう。

ギラルドゥスの第1作『アイルランド地誌』は1187年か1188年に完成され、ヘンリ二世に献呈された<sup>(18)</sup>。本文は大きく3部に分かれている。第1部は「アイルランドの歴史に関して」と題され、この島の地理、大地、生物、優れた点、劣っている点など、自然史に当たる記述がなされている。第2部は「驚異と奇跡に関して」で、常識では考え難い驚異や奇跡が多数記されている。「この地の住民に関して」と題された第3部には、アイルランドの歴史と現状が紹介されている。歴史叙述にはアイルランド人の出自、来島の事情、王家の系譜、ヴァイキングの侵入と定着、ノルマン征服後のイングランド勢力の侵入と定着が含まれている。現状紹介では、アイルランド人の悪しき性格や慣習、音楽の才能、キリスト教信仰、教会組織の問題点などが取り上げられている。見られるとおり、第1部と第3部を合わせると地誌にふさわしい内容となる。

『アイルランド征服』は『アイルランド地誌』に引き続いて執筆がすすめられ、1188年

か1189年に発表された<sup>(19)</sup>。王子リチャードに献呈されている。内容は1169年から1170年にかけてヘンリ二世が行ったアイルランド征服の状況を伝える歴史叙述である。王の要請を受けて、当時南ウェールズに定着していたアングロ・ノルマン領主がこの遠征の担い手となり、中にギラルドゥスの近親者も多数含まれていた。彼は一世代前の血縁者たちの活躍ぶりを征服の歴史として叙述しているわけで、当然アングロ・ノルマン側に偏った記事が多くなる。また、彼が大きな関心を寄せていたのは征服戦の経過よりも、むしろ要所、要所で戦闘指導者がどのような判断を下し、いかに士気を鼓舞したかであって、こうした箇所では創作も含めて文才を発揮している<sup>(20)</sup>。

『ウェールズ旅行記』は1191年に発表され、エリー教会の司教ウィリアム・ド・ロンシャン(William de Longchamp)に献呈された<sup>(21)</sup>。中心的内容は、ギラルドゥスが当時カンタベリー大司教であったボードウィン(Baldwin)とともにウェールズ各地をめぐり、第3回十字軍への参加を勧奨した時の記録である。巡行はウェールズ南東国境から始まり、ウェールズ南岸を東から西端まで進んだ後、北に転じて西海岸を西北端まで北上、そこから北海岸を東に進んで、ウェールズ北東部国境域で終わっている。一行は、当時居住者がほとんどいなかったと思われる中部山岳地帯は別として、ウェールズ全土に足を踏み入れ、主要な都市や教会で聖地奪回を求める説教をおこなった。ギラルドゥスは各地での勧奨の様子や成果を細かく記録しており、多少自慢話が含まれているが、事実を伝えていると判断してよい。また、各地で一行を迎えた聖・俗の支配者たちの言行を伝える部分には、他の史料にはない、いわば生の情報が含まれている<sup>(22)</sup>。

以上の説明からわかるように、『アイルランド地誌』、『アイルランド征服』、『ウェールズ旅行記』は『ウェールズ案内』といくつか共通点をもっている。第1に、4著作が発表されたのは1188年から1194年の間であり、構想や執筆の時期を推定するといずれもギラルドゥスがイングランド王宮に仕えていた時期からその直後である。第2は対象地域で、アイルランド、ウェールズともに「ケルト辺境」に属する。彼はイングランド王権がこの当時両地域の征服をもくろみ、実際に攻略を進めていたことをよく知っていたはずで、この知識が彼の対象地域選択に影響を与えた可能性が高い。第3は献呈先で、4著作はいずれもヘンリ二世をはじめとするイングランドの聖俗の支配者たちに捧げられている。

準備作業の最後として、本稿が先行拙稿とどのように関係しているのか確認しておこう。私はこれまでギラルドゥスに関して2つの点から考察してきた。ひとつは、『ウェールズ案内』第2巻第8、第9章と続く第10章が相互に矛盾する記述を含んでいるのはなぜかという点から、もうひとつはギラルドゥスが生涯の各時期に何を目標として活動していたのか、また、その目標はどこまで達成されたのかという点からである。前者に属するのは『ウェールズ案内』におけるギラルドゥス・カンブレンシスの二元性、「ギラルドゥス・

カンブレンシスと12世紀南ウェールズの政治世界 (I), (II)], 「ギラルドゥス・カンブレンシスの自己認識とウェールズ評価 (I), (II)」であり<sup>(23)</sup>, 後者に属するのは「ギラルドゥス・カンブレンシスのキャリア・デザイン (I), (II)], 「ギラルドゥス・カンブレンシスと『セント・デイヴィズ問題』 (I), (II), (III)], 「ギラルドゥス・カンブレンシスと『ブレコン大助祭問題』 (I), (II)」である<sup>(24)</sup>。ただし, この2区分は厳密なものではなく, 濃淡の差はあっても, どの拙稿でも2つの関心が重なっている。

以上5つの拙稿を経て, 本稿は再び『ウェールズ案内』に立ち戻り, 末尾3章にかかわる疑問の解消を目指す。第2拙稿から第5拙稿がギラルドゥス自身を取り上げているのに対し, 本稿は問題の著作そのものを再度分析することによって何か新しい手掛かりを得ようとするのである。

一般的に言って, ひとりの著者による作品の構成や内容は, 著者の執筆意図を踏まえた一貫性をもってはいるはずである。しかし, その著者が複数の執筆意図をもっている場合には, 記述の箇所によっていずれかの意図が強調され, 他の意図が表面化している箇所との間で多少ともずれが生じることがある。本稿はこうした可能性を念頭に置いて, 『ウェールズ案内』に記されている多くの事項がそれぞれどのようなギラルドゥスの執筆意図と結びつくのか検討してみる。

## II 執筆意図の確認 (I)

---

ギラルドゥスは『ウェールズ案内』の序文の中で, 同書をギルダス (Gildas) の『ブリタニアの破滅 (De Excidio Britanniae)』にならって書いたと記している<sup>(25)</sup>。本節は, この記述に彼の執筆意図のひとつが含まれていると考え, その内容を確認する。確認の作業は最近発表されたプライス Pryce, H. の論文「ジェラルド・オヴ・ウェールズ, ギルダス, および, 『ウェールズ案内』 (Gerald of Wales, Gildas and *The Description of Wales*)」の紹介を通して行う<sup>(26)</sup>。

論文のタイトルを説明すれば, ギラルドゥスの上記の発言を真剣に受け止め, 『ウェールズ案内』を『ブリタニアの破滅』とかわらせて理解する必要があるという主張である。ギラルドゥスの発言そのものは『ウェールズ案内』を読む人々にとって周知のことといってよい。しかし, これまではギルダスとの関係を具体的に確認せずに『ウェールズ案内』の内容を理解する試みが重ねられてきた。私もそのひとりである。なぜこの重要な手掛かりが見過ごされてきたのか, 私の場合で言えば, 一方は12世紀の地誌を, 他方は6世紀

の歴史を記した書という表面的な理解にとらわれていたからである。

まず、プライスが議論の出発点としているギラルドゥスの文章を一部引用する。当然この文章は本稿にとっても重要な史料となる。

- (1) ブリテンのすべての作家の中で、彼 [ギルダス] が唯一見習う価値のある人だと私は考えています。[本書の執筆中に私は] 何度も彼の著作を参照しました。彼は自分が見たことや [直接] 知っていることを書き記しましたが、それだけでなく、自らが [属する] 人々 [=ブリトン人] の衰退、没落を悲嘆の気持ちを込めて叙述しました。彼は、[文章を] 飾ることよりも、真の歴史を書くことを [重視しています]。私ギラルドゥスが従いたいのは、このギルダスなのです<sup>(27)</sup>。

以下、プライスの主張を、本稿の関心に合わせて、5つの論点にまとめて紹介する。なお、プライスは読者がギラルドゥスやギルダスについて基本的な知識をもっていると前提して議論を進めているので、理解に必要な情報を論点ごとにくゝを付して補足することにした。

- ① ギラルドゥスは『ウェールズ案内』の第1序文で、ギルダスの『ブリタニアの破滅』を手本としてウェールズ人の歴史を書いたと述べている。これまでの研究者は関心を同書の地誌的な記述とウェールズ人評価に集中し、このギラルドゥスの発言を軽視してきた。しかし、文脈から判断すると、ギラルドゥスの中心的目的はむしろギルダスにならったウェールズ人の歴史を語ることにあった可能性が高い。とすれば、彼が『ウェールズ案内』をどのような意味で歴史叙述とみなしていたのか改めて検討する必要がある。また、その検討結果は、同書の地誌的な記述やウェールズ人評価をより正しく理解する手掛かりとなるはずである<sup>(28)</sup>。

＜ギラルドゥスが『ウェールズ案内』を歴史書とみなしていたことは次の文章から明らかである。

- (2) 私が [自分に可能な] いろいろな研究分野の中で心を注いだのは、歴史叙述でした。私は [これを] 自分の故郷とその周辺地域について最善を尽くして紹介することから始めようと決意しました。それは、私が自分の生まれた土地に対して恩知らずな人間だと思われたくないからです<sup>(29)</sup>。＞

- ② まず、『ウェールズ案内』の内容が実際に歴史叙述かどうかという点を検討する。同書は地誌らしい構成になっており、表面的には歴史書に見えない。しかし、歴史的な説明はあちこちでなされている。たとえば、彼がウェールズ人の祖先とみなすトロイ人の歴史が語られ、また、ローマ軍撤退後にブリトン人の指導者たちが採った政策が後のウェールズ人に不幸をもたらしたと説明されている。同書が歴史書の側面をもっていることは間違いない<sup>(30)</sup>。

くただし、歴史とはいっても過去の事実が時の流れに沿って記されているのではなく、過去の重要な出来事から現在のウェールズ、ウェールズ人が抱える問題を説明することに主眼が置かれている。>

- ③ 次に、ギラルドゥスがギルダスから何を学びとったのか検討する。

ギルダスは、自分たちブリトン人が現在強いられている従属状況は、かつて愚かな指導者が異教徒をブリテン島に招来するなど神の教えに反する行動を繰り返したことに起因しており、ブリトン人が信仰を根本的に立て直さなければ現状からの解放はないと警告している<sup>(31)</sup>。

ギラルドゥスはこの論理構成から学んで、ウェールズ人の過去、現在、未来について語ろうとしている。具体的にいえば、なぜ勇敢なトロイ人の子孫であるウェールズ人が、かつてアングロ・サクソン人の攻撃に負けて西方へ追いやられたのか、また、現在ノルマン勢力に圧倒されて政治的独立を失いかけているのはなぜか、説明している<sup>(32)</sup>。

くただし、ギラルドゥスは、ギルダスとは違って、自分を完全にウェールズ人だと認識していない。また、ギルダスのように悔い改めれば従属状況から解放されると予言しているわけでもない。>

- ④ ギラルドゥスはウェールズ人の過去、現在、未来を語りながら、そこにいくつかの政治的メッセージを込めたと推定される。特に彼がウェールズはこれまでの歴史から考えて従属状態にあって当然であると述べている点が重要である。この発言はイングランド王権のウェールズ征服計画を支持するという彼の意思表示であった可能性が高く、さらに、『ウェールズ案内』がイングランド王国によるウェールズ征服に必要な情報や論拠を提供していると理解することもできる。少なくともこの観点から同書を読み直す必要がある<sup>(33)</sup>。

- ⑤ ギラルドゥスがこのようなメッセージを込めて『ウェールズ案内』を1194年に発表したのは、彼が「そのキャリアの中で直面していた特定の状況に対応する」必要に迫られていたからである。ギラルドゥスはヘンリ二世のもとで王子ジョンと親しかったが、ヘンリの死去とリチャード一世の即位によってその政治的立場が揺らぎ、これを挽回するために新王の愛顧を求めるメッセージを送った可能性が高い<sup>(34)</sup>。

上記①～⑤は内容から2つに区分できる。ひとつは①～③で、ギラルドゥスは『ウェールズ案内』をギルダスにならって著述したという指摘であり、もうひとつは④、⑤で、彼がこの著作の中にイングランド王宮に向けたメッセージを組み入れた可能性が高いという主張である。

史料 (1) を素直に理解すれば①～③は間違いのない点であり、同書の理解にとって重

要な指摘である。本稿はこの判断を踏まえて議論を進める。ただし、『ウェールズ案内』の全体がギルドゥスにならって書かれているわけではなく、同書は基本的に、少なくとも構成からみれば何よりも地誌である。

④と⑤もこの著作を理解する重要な手掛かりであり、本稿第3節と第5節で具体的に検討する。なお、①～③とは違って、④と⑤は必ずしも新しい論点ではない。『ウェールズ案内』執筆時にギラルドゥスが直面していた問題については、私も先行拙稿で検討を進めてきた。プライスもこの点を充分承知していることは、論文のタイトルが示している。論文を①～③までで終りとせず、④、⑤へと筆をすすめたのは、彼がギラルドゥスの執筆意図を全体として取り上げようとしたからであろう<sup>(35)</sup>。

以上のように私はプライスの主張を高く評価しているが、全面的に受け入れているわけではない。疑問点などを3つ挙げておこう。

第1は、論点①～③と④～⑤が無理なくつながるかという疑問である。プライスの論理構成を私の理解に従って整理すれば、ギルドゥスにならったウェールズ史叙述が劣ったウェールズ人のイメージを引き出し、これがイングランド王権のウェールズ征服を支持するという意思表示になった、ということになろう。しかし、ギルドゥスはブリトン人の誤った行動が滅亡の危機をもたらしたと糾弾しているが、滅亡を容認しているのではなく、むしろブリトン人が悔い改めによって再び繁栄することを願っている。とすれば、ギルドゥスの警告をそのままウェールズ人にあてはめても、彼らの滅亡、すなわち、イングランド王権によるウェールズ征服を正当化する根拠が出てくるわけではない。

第2に、ギラルドゥスは第2巻第10章でウェールズ人が独立する方法も記しており<sup>(36)</sup>、一方的に滅亡を予測しているわけではない。プライスはなぜこの章に言及しないのだろうか。

第3は私のテーマ設定から生じる問題である。第1節で説明したように、私はこれまで第2巻第8、9章と第10章とが矛盾する内容を含んでいるのはなぜかを問い、検討を重ねてきた。したがって、私にとってこれら3章は論証の対象であり、論拠として利用することは許されない。本稿にもこの縛りはかかっている。プライスは、こうした制約なしで議論を展開しているので、④、⑤に記されたギラルドゥスの意図を引き出すために第8、第9章の記述を使い、むしろこれら2章が中心的根拠となっている。

プライスの議論は示唆に富むが、こうした問題を含んでいるので、本稿でそのまま借用することはできない。プライスの視点を共有したうえで、根拠となる史料に対して彼とは違った検討を加える必要がある。本稿全体がその試みであるが、特に以下の第4節ではギルドゥスにならってウェールズ人の現在、過去、未来を語るというギラルドゥスの執筆意図を、また、第5節ではイングランド王宮のウェールズ征服に資する情報や論拠を提供しよ

うとする彼の執筆意図を、『ウェールズ案内』の記述に基づいて検討する。本節では前者の意図をギラルドゥスが間違いなくもっていたことの確認までに止めておこう。

では、ギルダスの『ブリタニアの破滅』はどのような著作なのか、第4節の議論の前提となる史料について説明しておこう。ただし、同書の内容は初期中世のブリテンに関心をもつ人々によく知られており、また、内容をすべて紹介すると相当のスペースが必要になる。そこで本稿と直接かかわる部分の要旨を第6節の後の付録にまとめることにし、ここでは全体の構成と著者ギルダスについて簡単に触れておこう。

『ブリタニアの破滅』は公開書簡の形をとった著作で、短い序文と本文から構成されている。本文は第1部と第2部に分かれる。前者は5世紀中葉までのブリトン人の歴史をまとめたもの、後者はギルダス時代の政治指導者と高位聖職者を厳しくとがめ、悔い改めなければブリトン人の国は滅亡するという警告を連ねたものである<sup>(37)</sup>。著者にとって重要だったのは後者であり、この点は公開書簡として書かれていること、また、2つの部分に割り当てられたスペースを見れば明らかである。構成から判断すると第1部は第2部の序論に相当し、嘆かわしい現状がどのような歴史的経過で生まれたのか説明していると言ってよい。しかし、本稿にとって重要なのは逆に第1部である。前述のように、ギラルドゥスは『ウェールズ案内』の序文で、自分はギルダスにならってウェールズ人の歴史を書いたと述べ、ギルダスを優れた歴史家と称えているが、こうした言及、評価が該当するのは第1部だからである。このように判断して、付録の要旨は第1部のみとし、第2部は除外してある。

第2部も同時代の人々や社会を批判しているのだから、後代の人が歴史と見なしうる記述が含まれているはずである。しかし、糾弾される行動や思想は大変抽象的に表現されており、その背景にある事実を具体的に確認するのは困難である。難解で、史料として利用できないのである。それに比べると第1部は分かりやすく、まずはブリトン人の歴史と言ってよい叙述になっている。ただ、第1部においても年代、地名、人名なしで出来事が語られている場合が多く、しかも、しばしば比喩的な表現が用いられているために、事実として確認できないものが少なくない。

ギルダスについて現在わかっているのはほぼ以下の点に限られる。それも、現存史料が断片的で、しかも、後代に書かれたものが多いので、推測の域にとどまる事項が少なくない。

彼が生まれたのは、『ブリタニアの破滅』中の自分への言及から、490年ころと推定され、6世紀前半に主としてウェールズで活躍した<sup>(38)</sup>。ウェールズの年代記は、ギルダスが565年にアイルランドを訪れた後、570年に死去したと記している<sup>(39)</sup>。

彼は生前だけでなく死後も広く尊敬されていたようで、800年より少し前にブルターニ

ユで書かれた伝記が残され、9世紀になっても彼を称える話が伝えられていた。これらの史料に従えば、彼はスコットランド南部のクライド（Clyde）王国に生まれ、南ウェールズのサントウィット・マイヨル（Llantwyt Mayor）の教会で聖イステッド（Illtud）の教えを受けた<sup>(40)</sup>。成人後彼はウェールズだけでなく、ブルターニュなど近隣諸地域で広く活躍し、人々に大きな影響を与えた。今日でもこれらの地域には彼に捧げられた教会が残っている<sup>(41)</sup>。

現存するギルダスの著作は『ブリタニアの破滅』だけである。彼が書いた手紙の断片や、彼のものと伝えられる告解文の序文が現存しているが、いずれも短く、重要な情報は含まれていない。彼が『ブリタニアの破滅』を書いたのは540年ころと推定されている。同書の中で彼は、ベイドン（Badon）丘の戦いでブリトン人が勝利した年（490年代）に自分が生まれ、それから44年たったと記しているからである<sup>(42)</sup>。

### Ⅲ 執筆意図の確認（Ⅱ）

『ウェールズ案内』第1序文の冒頭で、ギラルドゥスは次のように述べている。

(3) [しばらく前に私は3年を費やして『アイルランド地誌』を書き上げ、アイルランドの特異な事柄を紹介しました。次に、私は2年かけて『アイルランド征服—予言を付した歴史』を完成しました。さらに、私はカンタベリー大司教の巡行に同行して『ウェールズ旅行記』を発表し、決して容易ではなかったこの伝道が忘れられないように記録しました。それに続いて]、この小著で私はウェールズについて案内し、・・・他の人々には知られておらず、また、[他の人々とは]大きく異なっている [ウェールズの] 人々の性格を明らかにしようと考えました。・・・

私は [この小著を]、思慮深さと優れた立ち振る舞いで称えられる猊下、カンタベリー大司教ハーバートに捧げます。[猊下はほかにも素晴らしい作品の献呈を受けておられるでしょうから、私の著作を差し上げるのも無意味ではないと考えました。]<sup>(43)</sup>

ここに明示ないし暗示されているギラルドゥスの意図を整理すれば、次の3点となろう。

①人々に知られていないウェールズを紹介する。②『ウェールズ案内』を『ウェールズ旅行記』と組み合わせ、アイルランドについてと同様に、ウェールズ関連の著作集を完成する。③カンタベリー大司教ハーバート・ウォルター（Walter, H.）にこの書を献呈し、彼の評価ないし好意を得る。

まず①の意図について検討する。『ウェールズ案内』というタイトルが示しているように、ギラルドゥスはウェールズが未知の国であり、それゆえ紹介に値すると考えていた。ここで検討する必要があるのは「[他の人々とは]大きく異なっている」ウェールズ人という表現である。「異なる (diversus)」という語は何かとの対比で使われるのが普通であるが、史料 (3) にはその対象ないし基準は明示されていない。しかし、ギラルドゥスの判断基準ははっきりしており、それは彼が属していた社会、より具体的には、イングランドの支配者たち、とくに王宮に集う人々が形成していた社会であった<sup>(44)</sup>。王宮の人々は自分たちの社会がブリテン諸島はむろん、西ヨーロッパの中でも卓越した豊かさを享受しており、その意味で「文明」社会だと考えていた。父がノルマン貴族で、聖職者として王に仕えていたギラルドゥスも同様な判断基準をもっていたのである。イングランドとの対比で「大きく異なっている」のであれば、ウェールズはイングランドに比してはるかに文明度が低い国ということになる。

この点については『ウェールズ旅行記』に見られる *horridos Kambria* という表現も参考になる<sup>(45)</sup>。*horridos* は本来「荒々しい」、「粗い」といった意味の語で、必ずしも見下した評価を示すわけではない。しかし、ここでは「文明度が低い」、「プリミティヴ」といった意味でつかわれている。ギラルドゥスはイングランド王宮の人々に対して、ウェールズ人は彼らよりも文明度が低い、遅れた人々であると紹介しているのである。この点をまず確認しておこう。

しかし、*diversus* や *horridos* という語で彼が表現している具体的な事項、特にウェールズ人・社会の特徴だと強調している事項をみると、彼はもっと厳しい評価を下していると考えざるを得ない。イングランドよりも遅れているといった相対的な評価であれば、特異さが解消される可能性は残っているはずだが、後の第5節で紹介する事項はウェールズ人の本性に根ざすものとして書かれており、どうにもならないデメリットとして挙げられている。また、『ウェールズ案内』の中にはウェールズ人に関して「野蛮な人々と同様に」という表現もみられる<sup>(46)</sup>。以上の点から判断して、ギラルドゥスがウェールズを単に未知の国として紹介しているのではないことは明らかであろう。

この推定が当たっているとして、ひとつ疑問が浮かび上がる。ウェールズを自分の国と呼び、実際主要な活動の場としていたギラルドゥスが<sup>(47)</sup>、なぜあえてウェールズの文明度の低さを強調しようと考えたのか。文筆の才能を発揮し、名声を得るという願望のほかには何かより具体的な理由なり目的があったのではなかろうか。

史料 (3) に記された第2の意図は、『アイルランド地誌』と組み合わせると、いわば「ケルト辺境」の社会や住民をまとめて紹介することであった<sup>(48)</sup>。なぜギラルドゥスがこのような構想を立てたのか推測してみよう。

まず、彼は両地域に関する情報を容易に入手できる条件をもっていた。ウェールズは彼が生まれ、育った所であり、血縁者を中心に多くの知人がいた。アイルランドには1世代前に移住した親族が多数居住しており、彼自身もしばしば訪問、滞在して直接情報を集めている<sup>(49)</sup>。彼が両地域について他人には真似のできない著作をまとめようと考えたのは自然である。

しかし、理由はこれだけではなかった。これは『アイルランド地誌』を読むとよくわかる。彼はアイルランドをウェールズ以上に文明度が低く、文字通り野蛮な国と見なしており、住民に関する記述の大部分は彼らの短所の紹介に充てられている<sup>(50)</sup>。反対に、アイルランド人が古くより高度な文化を作り上げていたことへの言及はない。

なぜ彼があえて偏ったアイルランド像を描いたのか。この問いに関連してすぐに思いつくのは、ヘンリ二世に仕えていた彼は、王宮の人々が共有するアイルランド征服計画をよく知っていたことである。単に知っただけではなく、1185年には王子ジョンに付き添って自らアイルランド遠征に参加している<sup>(51)</sup>。実際彼が『アイルランド地誌』で使っている情報はほとんどすべてこの遠征中、あるいは、遠征後彼がアイルランドにとどまっていた間に集められたものである<sup>(52)</sup>。『アイルランド地誌』は構想の段階から征服すべきアイルランドという認識によって大きく方向づけられていたと考えてよい。アイルランドに関するもうひとつの著作『アイルランド征服』ではこの方向付けがより明確にみられる。同書の末尾で彼は、2つの章を設けてアイルランドを征服し、統治する方法を提案しているのである<sup>(53)</sup>。ギラルドゥスはアイルランドに関する2著作をイングランド王宮のアイルランド征服計画を念頭に置いて執筆したことはまず間違いない。

このアイルランドとの組み合わせで『ウェールズ案内』が構想されたのであるから、ここでも王宮のウェールズ征服計画が大きな影響を与えていた可能性が高い。実際、ウィリアム一世以降の王はウェールズを征服の対象とみなし、何度も侵入、征服を試みてきていた。征服に関しては隣接するウェールズのほうがアイルランドよりも先であった。ウェールズ人支配者たちは地域ごとにイングランド勢力と対決、妥協、あるいは、敗退を重ね、政治地図はめまぐるしく変化したが、王宮がウェールズの征服を完全に諦めることはなかった。ギラルドゥスはこうした王宮の意図や行動をいわば現場で経験し、知っていたのである。

以上から判断して、『ウェールズ案内』の記述にイングランド王宮の利害が何らかの形で反映していると考えるのはむしろ自然であろう。何らかの形でといったあいまいな言い方をしたのは、同書には一か所を除き征服計画を示唆する言及がなく、いわば政治的脱色がなされた記述に終始しているからである。その例外とは、先行拙稿が検討を重ねてきた第2巻第8、第9章であり、ウェールズを征服する方法と統治する方法が提案されている。

アイルランドの場合と同じなのである。

このように説明すると、第8、第9章をとりあげればそれだけで『ウェールズ案内』はイングランド王宮のウェールズ征服計画と深くかかわっているという結論が容易に出てくる、したがって、アイルランドとの共通性といった回り道をする必要がないではないか、という疑問が出されるかもしれない。同書の記述を部分的に取り上げて単純に推論すればその通りである。しかし、私はこれまで一貫して、なぜ第8、第9章が書かれたのかという問題設定をしており、この2章から説明を起こすことは論理構成上許されない。加えて、続く第10章にはウェールズ人が政治的に独立し、強国を築くための方法が提案されており、先行の2章と矛盾する内容になっている。疑問は3章まとめて解く必要があるわけで、この意味でも第8、第9章からの安易な推論は避けなければならない。

しかし、これら2つの章を利用しなくても、史料(3)だけで『ウェールズ案内』にイングランド王宮のウェールズ征服計画が影響を与えていたことを確認できる、と私は考えている。判断の手掛かりは同書の献呈先である。少し説明しよう。

史料(3)でギラルドゥスはカンタベリー大司教ウォルターの資質を高く評価し、それゆえに『ウェールズ案内』を献呈すると記している。しかし、これは彼の本心ではなかった。逆に彼はウォルターが尊敬すべき聖職者であるとまったく考えていなかった可能性が高い。それは、これより5年ほど後、ギラルドゥスとウォルターが「セント・デイヴィズ問題」で対立した際に、彼はウォルターについて聖職者に必要な品性を欠き、卑劣な策を弄する人であると酷評しているからである<sup>(54)</sup>。時として誇大な表現を用いるギラルドゥスであるが、現職の大司教、それも自分の属する聖界の頂点に立つ人に向かってこのような評価を下しているのは、ウォルターに対して強い反感をもっていたからである。したがって、5年前とはいえ、ギラルドゥスは評価も尊敬もしていなかったウォルターをあえてほめたたえ、自信作を献呈したことになる。

ギラルドゥスはなぜこのような心にもない行動をとったのか。この点について推論する手掛かりは、先行する3著作がいずれもイングランド王宮の聖・俗有力者に献呈されているという事実である。具体的に言えば、『アイルランド地誌』はヘンリ二世に、『アイルランド征服』は王子リチャードに、『ウェールズ旅行記』はエリー司教ウィリアム・ド・ロンシャンに捧げられている<sup>(55)</sup>。ヘンリ二世は王宮の主であり、リチャードは王位継承者である。ウィリアムは『ウェールズ旅行記』を贈られた翌年(1189年)に行政長官に任命された王宮の実力者であり、同様にウォルターも『ウェールズ案内』を贈られた時には行政長官を兼ねていた<sup>(56)</sup>。このようにアイルランドとウェールズに関する4著作はいずれも王宮に集う最高権力者に献呈されているのである。

なぜ彼はこうした人々を選んだのか。彼は自著のいわば箔付けのために権力ある人々を

利用しようとしたのであろうか。ギラルドゥスが4著作それぞれに自信をもち、その出来栄えをほめてもらおうとしたことは間違いない。しかし、それだけではなく、彼はより具体的な意味を込めて自著を4人の有力者に贈ったと私は考えている。それは、上で説明したアイルランド、ウェールズに関する情報提供である。両地域の征服計画が王宮で共有されていたことを考えると、献呈先が、たとえばヘンリ二世に集中せず、王宮の政策決定に直接かかわる人々にまで拡張されているのも不思議ではない。

より個人的な状況からしても、ギラルドゥスには王宮で発言力をもつ人々の愛顧を求めべき理由があった。

ギラルドゥスは第1回パリ留学時代、おそらく20代の前半に自分のキャリア・デザインを作り上げたと推定されるが、その中軸をなしたのはセント・デイヴィズ司教となって教会改革を進めることであった。彼は帰国後デザイン実現のために積極的に活動した。まず、カンタベリー大司教の命を受けて南ウェールズの教会改革に取り組み、大きな成果を上げた。この功績が認められて彼は1175年にブレコン大助祭に任命されている。彼に対するセント・デイヴィズ教会メンバーの信頼も増大し、1176年の新司教選出の際に教会が王に提出した4人の候補リストの中に彼の名も含まれていた<sup>(57)</sup>。

ところが、王国内の司教選出権を掌握しつつあったヘンリ二世は教会が提出した司教候補リストを却下し、新しいリストの提出を命じた。ギラルドゥスは自分が候補に挙がった時点で、おそらく推挙の手続きが王権の作り上げた候補選出ルールに一部反しているとわかったからであろう、自ら辞退の意を表明している。年齢的に充分余裕があるから次のチャンスを待てばよいと判断したのである<sup>(58)</sup>。

ここまでは大きな問題はなかったが、その後彼にとって不本意かつ予想外の事実が判明した。王が上記候補リストを拒否した理由が2つあり、ひとつは候補選出手続きをめぐって彼が王宮の意向に反する画策をしたと疑われたこと、もうひとつはヘンリ二世の意向で、彼にこれ以上高位の聖職を与えると王国のウェールズ支配にとって危険な存在になると判断したためだとわかったのである。前者はギラルドゥスの言うように全くの誤解であった可能性が高く、再度手続きを踏めばまずは解消する。しかし、後者の理由はより根源的であり、簡単に手直しできる問題ではなかった。というのも、王がギラルドゥスを危険視したのは、ギラルドゥスは南ウェールズ王家の血統に属し、ウェールズ人支配者たちと親しい関係にあるので、彼がこの地域の聖界最高位につくと、聖・俗のウェールズ人支配者たちが結束して勢力を拡大する可能性が高い、その結果ウェールズにおける王の支配が危険にさらされると考えたからである<sup>(59)</sup>。

王のこの判断が、セント・デイヴィズ司教就任を目指していたギラルドゥスのキャリア・デザインにとって大きな障害になることは明らかである。自分の血統を変えることは

不可能であり、これまで王に重用されてきた最大の理由が南ウェールズの支配者たちとの親しい関係だったからである。ヘンリ二世は彼のメリットを充分承知しながら、これを逆手にとって司教任命に反対しており、理屈の上ではこの矛盾を突くことも考えられるが、主君に対してできることではない。

これはヘンリ二世の在位中、いや、ウェールズ征服計画が廃止されないうぎりギラルドゥスに司教就任の可能性がないという苦境である。しかし、彼はあきらめなかった。出自に由来するマイナスは変えようがないが、これを上回るプラスを自分もたらしうると王に認識してもらうことで難関を突破しようとした。具体的に言えば、自分がこれまでウェールズにおける王権伸張に力を尽くしてきたことを強調し、今後はさらにその努力を重ねる決意であると王に訴える、という方法である<sup>(60)</sup>。

ギラルドゥスの決意は単なる方法の問題ではなく、ギラルドゥスにとって基本的なスタンスの変更を意味した。上で説明したように、彼はこれまでイングランド勢力とウェールズ勢力の間に立ち、王の要請に応じて両者の連携をはかる役割を果たしていた。自分が生来持っている二元性、すなわち、アングロ・ノルマン貴族とウェールズ王家の血統を利用して、できるかぎり中立的なスタンスをとり、仲介役に必要な信頼を双方の側から引き出していた。これが政治の場で影響力を発揮する彼の最大の武器であった。

しかし、ヘンリ二世の評価を改めるためにギラルドゥスはあえてこのメリットを捨てる決心をした。ウェールズ人支配者たちの疑惑を招くことは覚悟の上で、自分がいかに王の有能かつ忠実な家臣であるか実際の行動で示すことにしたのである。

その代表的な事例が、1188年にカンタベリー大司教ボードウィン案内してウェールズをめぐる旅である<sup>(61)</sup>。この旅はヘンリ二世が立てた第3回十字軍計画の準備作業であり、行く先々で十字軍参加を勧奨する集いが開かれた。表面的にみればボードウィンとギラルドゥスがこの巡行を率いるのはごく自然である。聖地奪回という重要な目標を立てたのであるから、王国の最高位聖職者の陣頭指揮は熱意の表明と理解できる。また、ウェールズの案内役としては、宗教的情熱の点でも、各地の支配者たちとの連携の点でも、ギラルドゥスが最もふさわしい。

しかし、一行を迎えたウェールズ人支配者たちは、この巡行を単純な十字軍参加勧奨とは受けとめなかった。当時ウェールズ人勢力の強い地域の教会では、イングランド王宮とカンタベリー教会が主張していたウェールズ教会に対する支配権を自分たちの自主性を損なう不当な要求と受けとめて反発する動きがあり、その中心にいたのがセント・デイヴィズ教会であった。こうしたウェールズの教会、とくに在地のウェールズ人勢力と密接な関係をもっていた聖職者からすれば、カンタベリー大司教は敵対者であり、自分たちに圧力をかけてくるイングランド王権を代表する存在であった。彼らは大司教の巡行、中でも主

要な教会への訪問を王と大司教が演出した支配権確認の行動と受けとめたのである。実際、巡行を妨げる動きもあったとギラルドゥスは記している<sup>(62)</sup>。

巡行そのものは、ギラルドゥスの事前の説得があったからであろう、順調に進められ、無事完了している。しかし、巡行の先導役をつとめたギラルドゥスに対するウェールズ人支配者たちの評価は、これを機に大きく変わったと推測される。彼らはこれまでギラルドゥスが自分たちの立場や利益を無視することはないと信頼していた。王の使者として仲介していることが分かっているが、王の意思を押し付けるためだけに来たのではないと信じていたから、交渉、説得に応じたのである。しかし、今回ギラルドゥスはこの中立性を捨て、はっきり王権の側に立って行動している、こうウェールズ人支配者たち判断した可能性が高い<sup>(63)</sup>。これはギラルドゥスの存在価値そのものの危機である。彼は南ウェールズの政治・宗教状況に通じていたから、巡行の先導を依頼された時点でこのリスクに気付いていたはずである。しかし、王の命を受けており、表面的な巡行目的からすれば自分が最適者であることもよく承知していた。

ギラルドゥスはこうした内面の葛藤を表に出すことなく、大司教が任務を充分遂行できるように配慮し、忠実に仕えている。彼はリスクを承知しながらあえて王の側に立って見せている。この彼の決断には2つの理由があったと私は考える。ひとつは、状況からして王の要請を断れないと判断したこと、もうひとつは、断れないのであれば、逆にこれを王の信頼を回復する機会として利用するのが得策だと判断したことである。

『ウェールズ旅行記』にはギラルドゥスが王の評価を変えるという隠れた意図をもって巡行に参加していたことを示唆する記述は全くない。十字軍参加勳章がいかに成功したか強調しているだけである。しかし、彼が巡行中や終了後に大司教が自分を高く評価してくれたことを強調しており<sup>(64)</sup>、これは彼がまず大司教の信頼を得て、王の愛顧につなげようとする意図の表れと考えることができる。

ギラルドゥスは『ウェールズ案内』の構想をウェールズ巡行中に立てたと推定されている<sup>(65)</sup>。とすれば、彼はどうしたら王の信頼を確保できるかという課題を抱えている時に同書の執筆を思い立ったことになる。ギラルドゥス自身は明示していないが、この点も『ウェールズ案内』に込められた意図のひとつと考えるべきである。少なくともそうした観点から同書を見直すことが許されるであろう。

前節と本節の検討から、私はギラルドゥスが『ウェールズ案内』を構想する段階で3種の執筆意図ないし目的をもっていと推定する。第1は、文筆家としての評価を高めるために人々のあまり知らないウェールズの地誌を書くことで、これは同書の内容や構成がはっきり示している。第2は、ギルダスにならってウェールズ人の歴史を概観しながら現在のウェールズ人・社会を批判し、将来に向かって警告ないし提案することである。この点

については彼自身が明記している。第3は、ウェールズ征服計画を共有しているイングランド王宮の人々に向かって計画遂行に役立つウェールズ人・社会の情報を伝え、さらに、征服を正当化する論拠を提供することである。この意図は、事の性質上、また、彼のこれまでとってきたスタンスからして、同書に明記することはできなかったが、ギラルドゥスにとって切実な問題であった。

## 註

(I)

(1) 本稿で利用するのは下記の校本と英訳である。

Giraldus Cambrensis: *Descriptio Kambriae* (in Dimock, James E. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 6, H. M. S. O., 1866) (参照文献表の [1])

Giraldus Cambrensis: *The Description of Wales* (in Thorpe, Lewis (trans.): *The Journey through Wales and The Description of Wales*, Penguin Books, 1978. (参照文献表の [13])

(2) ギラルドゥスは、第2巻第8、9章でイングランド王宮のウェールズ征服と統治に肝要な政策を提案しながら、続く第10章ではウェールズ人支配者たちのためにウェールズの独立達成に必要な条件を挙げている。この問題ないし疑問については本稿第6節で改めて紹介する。

(3) [1] Giraldus Cambrensis, p. 161. [13] Giraldus Cambrensis (Thorpe (trans.)), p. 214. 本稿第2節の史料(2)を参照。

(4) この点については、第2節でプライスの研究を紹介しながら説明し、第4、5節で史料に基づき確認する。

(5) [79] 永井、第2節～第4節参照。

(6) [37] Bartlett, pp. 216～17.

(7) [1] Giraldus Cambrensis, pp. xxii～xxxii.

なお、パートレットより先にソープは『ウェールズ案内』に3種類の版が存在するという見解を提示していた。第1版、第2版はディモックの見解に従うが、このほかに2つの版にない4箇所の記述を含む16世紀のマニュスクリプトを第3版と判断したのである。しかし、この16世紀のマニュスクリプトのオリジナルがギラルドゥスの時代に書かれたという確証はなく、独自の部分はむしろ後代の筆者生が書き加えたと考えほうが自然である。パートレットは同様に考えたのであろう、このマニュスクリプトを第2版の変種と見なしている。本稿の目的からしても、ギラルドゥスが直接関係していないマニュスクリプトは検討の対象とはならない。[13] Giraldus Cambrensis (Thorpe (trans.)), pp. 49～52.

(8) [13] Giraldus Cambrensis (Thorpe (trans.)), p. 211, n. 447, n. 448.

(9) [37] Bartlett, p. 216.

(10) [37] Bartlett, p. 27.

(11) [1] Giraldus Cambrensis, pp. xxii～xxxii. [13] Giraldus Cambrensis (Thorpe (trans.)), pp. 50, 53.

(12) [13] Giraldus Cambrensis (Thorpe (trans.)), pp. 278～79.

(13) [79] 永井、第4節。

(14) 第2版の改訂点とその意味については別稿で検討したいと考えている。

(15) 上の註(12)を参照。

(16) 第2版で削除された部分は、第2巻第9章の末尾の文章であり、本稿付録の「『ウェールズ案内』

要旨」では下線を加えてある。

- (17) 本稿第2節の史料(1)を参照。
- (18) [3] Giraldus Cambrensis. [18] ギラルドゥス・カンブレンシス(有光(訳))。  
 パートレットは1188年に完成したとしている。[37] Bartlett, p. 213.
- (19) [4] Giraldus Cambrensis. [9] Giraldus Cambrensis (Scott, & Martin (ed., trans.)).  
 パートレットは1189年に完成したとしている。[37] Bartlett, p. 215.
- (20) なお、この著作の最後の部分はギラルドゥスの予言をつらねており、本稿とは関係のない内容となっている。
- (21) [2] Giraldus Cambrensis. [15] Giraldus Cambrensis (Thorpe (trans.)).
- (22) 以上は『ウェールズ旅行記』にふさわしい内容であるが、同書の過半を占めているのは当時ウェールズ各地に伝えられていた異常な出来事の記述で、超自然的現象、奇跡、自然の驚異的な力など多様な話が収録されている。ギラルドゥスは巡行先でこうした話を積極的に聞き取りし、記録したのであろう。
- (23) [76] 永井, [77] 永井, [78] 永井。
- (24) [79] 永井, [80] 永井, [81] 永井。

(II)

- (25) [1] Giraldus Cambrensis, p. 168. [13] Giraldus Cambrensis (Thorpe (trans.)), p. 214. 下の史料(1)を参照。
- (26) [58] Pryce.
- (27) [1] Giraldus Cambrensis, p. 168. [13] Giraldus Cambrensis (Thorpe (trans.)), p. 214.  
*Prae aliis itaque Britanniae scriptoribus, solis mihi Gildas, quoties eundem materiae cursus obtulerit, imitabilis esse videtur. Qui ea quae vidit et ipse cognovits scripto commendans, excidiumque gentis suae deplorans potius quam describens, veram magis historiam texuit quam ornantam. Gildas itaque Giraldus sequitur.*
- (28) [58] Pryce, p. 115.
- (29) [1] Giraldus Cambrensis, p. 161. [13] Giraldus Cambrensis (Thorpe (trans.)), p. 214.  
*Cum nter varia literarum studia ad historias scribendas studiosae mentis aciem applicuerim, imprimis patriam patriaeque vicinas et conterminas ex industria regions, ne natali ingratus solo viderer, . . . .*
- (30) [58] Pryce, pp. 116~18.
- (31) [58] Pryce, pp. 120~21.
- (32) [58] Pryce, pp. 120~22.
- (33) [58] Pryce, pp. 116, 120.
- (34) [58] Pryce, pp. 116, 123. 引用部分は p. 116.
- (35) 新しい見解としては、ギラルドゥスが王子ジョンと親密であったことがひとつの原因となって、リチャード一世がギラルドゥスを警戒し、これが王宮を去ることにつながったという指摘が重要である。
- (36) ギラルドゥスのはっきりウェールズ人の独立に言及しているのは第2巻第10章である。本稿4節でこの章について紹介する。
- (37) 歴史叙述の部分は全体の約20%に過ぎない。
- (38) [21] Gildas (Winterbottom (ed., trans.)), p. 1.
- (39) [21] Gildas (Winterbottom (ed., trans.)), p. 3. [25] William ab Ithel (ed.), p. 5.

- (40) [85] *Encyclopedia of Wales*, p. 317.  
 (41) [21] *Gildas* (Winterbottom (ed., trans.)), p. 3. [85] *Encyclopedia of Wales*, p. 317.  
 (42) [21] *Gildas* (Winterbottom (ed., trans.)), p. 28.

(III)

- (43) [1] *Giraldus Cambrensis*, pp. 155~56. [13] *Giraldus Cambrensis* (Thorpe (trans.)), p. 211.  
 ただし、以下の原文と拙訳は第1版を再現するために、文中の大司教名を第1版の献呈先ハーバートに改めている。

*Kambriae nostrae descriptionem, gentisque naturam, aliis alienam nationibus et valde diversam, hoc opusculo declarare, tibi que, vie inclite, Huberte Cantuariensis archiepiscopi, quem discretio partier morumque venstas laudabilem reddunt.*

- (44) [78] 永井, 第2節。  
 (45) [2] *Giraldus Cambrensis*, p. 7. [15] *Giraldus Cambrensis* (Thorpe (trans.)), p. 68.  
 (46) [87] *Dictionary of Medieval Latin from British sources*, p. 1174. [1] *Giraldus Cambrensis*, p. 223, [13] *Giraldus Cambrensis* (Thorpe (trans.)), p. 271.

先行拙稿で私は *horridos* を「野蛮な」と訳してきた。この訳は語義からすると誤りに近いが、ギラルドゥスが *horridos Kambria* と記した時に思い浮かべていたイメージを推測するとこのように訳する可能性が出てくる。

- (47) [78] 永井, 第3節。  
 (48) ギラルドゥスはスコットランドについても同様な著作を発表する計画をもっていたようで、実現していればいわゆるケルト辺境全体をカバーする著述群になっていたはずである。  
 (49) ギラルドゥスよりも一世代前の血縁者がアイルランド遠征に参加して、南東部に定着していた。彼自身も1183年と1185年~86年にアイルランドを訪れ、情報を積極的に集めている。  
 (50) [78] 永井の第8節に、ウェールズ人とアイルランド人に対してギラルドゥスが与えた評価がまとめられている。  
 (51) ギラルドゥスは前年1184年から王宮付きの司祭としてヘンリ二世に直接仕えていた。彼は、遠征先アイルランドに血縁者が多数定住して事情に通じていたこと、また、遠征の通路に選ばれた南ウェールズの出身であることなど、王子に随伴して支援するのに最もふさわしい人材であった。  
 (52) [3] *Giraldus Cambrensis*, p. 8. [18] ギラルドゥス・カンブレンシス (有光訳), p. 18.  
 (53) [77] 永井, 第7節。  
 (54) [80] 永井, 第8節。  
 (55) [3] *Giraldus Cambrensis*, p. 20. [9] *Giraldus Cambrensis* (Scott & Martin (eds.)), p. 20. [13] *Giraldus Cambrensis* (Thorpe (trans.)), p. 63, n. 1, p. 211 n. 477.  
 (56) [88] *Handbook of British Chronology*, p. 70.  
 (57) [79] 永井, 第2節。  
 (58) この当時王宮付き司祭の職は司教への重要なステップと見なされており、この職に抜擢されたギラルドゥスはキャリア・デザインの実現も間近いと期待していたはずである。加えて、彼が望んでいた通りセント・デイヴィズ教会の主要メンバーが自分を司教候補に推してくれたのであるから、実質的な条件は整っていたのである。  
 (59) [5] *Giraldus Cambrensis*, p. 43. [20] *Giraldus Cambrensis* (Rutheford (ed., trans.)), p. 22. [79] 永井, 第2節。  
 (60) [79] 永井, 第4節。  
 (61) [2] *Giraldus Cambrensis*. [14] *Giraldus Cambrensis*. [79] 永井, 第3節。

- (62) [5] Giraldus Cambrensis, p. 75. [20] Giraldus Cambrensis, p. 53.  
 (63) [78] 永井, 第4節。  
 (64) [2] Giraldus Cambrensis, p. 79. [14] Giraldus Cambrensis, p. 57. [79] 永井, 第3節。  
 (65) [13] Giraldus Cambrensis (Thorpe (trans.)), p. 16.

## 参照文献

### I 史料

#### (A) ギラルドゥスの著作と訳本

- [1] Giraldus Cambrensis: *Descriptio Kambriae* (in Dimock, James E. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 6, H. M. S. O., 1866.) (『ウェールズ案内』)  
 [2] Giraldus Cambrensis: *Itinerarium Kambriae* (in Dimock, James E. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 6, H. M. S. O., 1866.) (『ウェールズ旅行記』)  
 [3] Giraldus Cambrensis: *Topographia Hibernica* (in Dimock, James E. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 5, H. M. S. O., 1867.) (『アイルランド地誌』)  
 [4] Giraldus Cambrensis: *Expugnatio Hibernica* (in Dimock, James E. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 5, H. M. S. O., 1867.) (『アイルランド征服』)  
 [5] Giraldus Cambrensis: *De Rebus a se Gestis* (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 1, H. M. S. O., 1861.) (『自叙伝』)  
 [6] Giraldus Cambrensis: *Vita Sancti Dividis Menevensis Archiepiscopi* (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis* vol. 3, H. M. S. O., 1863.) (『セント・デイヴィズ教会大司教聖デイヴィッド伝』)  
 [7] Giraldus Cambrensis: *De Vita Galfredi Archiepiscopi Eboracensis* (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 4, H. M. S. O., 1873.) (『ヨーク大司教ジョfrey伝』)  
 [8] Giraldus Cambrensis: *De Jure et Statu Menevensis Ecclesiae, Dialogus* (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 3, H. M. S. O., 1863.) (『セント・デイヴィズ教会の権利と地位』)  
 [9] Giraldus Cambrensis, (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed., trans.)): *Expugnatio Hibernica, The Conquest of Ireland*, Royal Irish Academy, 1978. (『アイルランド征服』)  
 [10] Giraldus Cambrensis (Davies, W. S. (ed.)): *De Invectionibus/The Book of Invectives of Giraldus Cambrensis*, *Y Cymmrodor*, vol. xxx, 1920. (『論駁』)  
 [11] Giraldus Cambrensis (Lefevre, Y. & Huygens, R. B. C. (eds., trans.)): *Speculum Duorum, or a Mirror of Two Men*, University of Wales Press, 1974. (『二人の鑑』)  
 [12] Giraldus Cambrensis: *The Description of Wales* (in Wright, Thomas (ed.), Foster, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863.) (『ウェールズ案内』)  
 [13] Giraldus Cambrensis: *The Description of Wales* (in Thorpe, Lewis (trans.): *The Journey through Wales and The Description of Wales*, Penguin Books, 1978. (『ウェールズ案内』)  
 [14] Giraldus Cambrensis: *The Itinerary through Wales* (in Wright, Thomas (ed.), Foster, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863.) (『ウェールズ旅行記』)  
 [15] Giraldus Cambrensis: *The Journey through Wales* (in Thorpe, Lewis (trans.): *The Journey through Wales and The Description of Wales*, Penguin Books, 1978. (『ウェールズ旅行記』)  
 [16] Giraldus Cambrensis: *Topography on Ireland* (in Wright, Thomas (ed.), Forester, Thomas

- & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863. (『アイルランド地誌』)
- [17] Gerald of Wales, (O' Meara, John (trans.)): *The History and Topography of Ireland*, Penguin Books, 1951. (『アイルランド地誌』)
- [18] ギラルドゥス・カンブレンシス (有光秀行訳): 『アイルランド地誌』, 青土社, 1996年。
- [19] Giraldus Cambrensis: The Vaticinal History of the Conquest of Ireland (in Wright, Thomas (ed.), Forester, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.)): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863. (『アイルランド征服』)
- [20] Giraldus Cambrensis (Rutherford, Anne (ed., trans.)): "I, Giraldus", *The Autobiography of Giraldus Cambrensis (1145~1223)*, Rhwymbooks, 2002. (『自叙伝』)
- (B) ギルダスの著作と訳本
- [21] Gildas (Winterbottom, M. (ed., trans.)): *The Ruin of Britain and Other Works*, Phillimore, 1978.
- (C) 年代記と訳本
- [22] William ab Ithel, J. (ed.): *Annales Cambriae*, H. M. S. O., 1860.
- [23] Jones, Thomas (ed., trans.): *Brut y Tywysogion or The Chronicle of the Princes, Red Book of Hergest Version*, University of Wales Press, 1955. (『諸侯年代記』ハージェスト赤版)
- [24] Jones, Thomas (ed.): *Brut y Tywysogion, Peniarth 20*, University of Wales Press, 1941. (『諸侯年代記』ペニアルス版)
- [25] Jones, Thomas (ed., trans.): *Brut y Tywysogion, or The Chronicle of the Princes, Peniarth MS. 20 Version*, University of Wales Press, 1952. (『諸侯年代記』ペニアルス版)
- (D) 「ウェールズ法」と訳本
- [26] Owen, Aneurin (ed., trans.): *Ancient Laws and Institutes of Wales, Laws Supposed to be Enacted by Howel the Good*, The Commissioners of the Public Records of the Kingdom, 1841.
- [27] Wade-Evans, A. W. (ed., trans.): *Welsh Medieval Law, being a Text of Laws of Howel the Good*, Clarendon Press, 1909. (『カヴネルス本』)
- [28] Emanuel, Hywel David (ed.): *The Latin Texts of the Welsh Laws*, University of Wales Press, 1967. (『ラテン語版』)
- [29] Williams, Stephen J. & Powell, J. Enoch (eds.): *Cyfreithiau Hywel Dda yn ol Llyfr Blegywryd (Dull Dyfed)*, University of Wales Press, 1942. (『ブレギウリッド本』)
- [30] Wiliam, Aled Rhys (ed.): *Llyfr Iorwerth, a Critical Text of the Venedotian Code of Medieval Welsh Law*, University of Wales Press, 1960. (『イオルウェルス本』)
- [31] Jenkins, Dafydd (ed.): *Llyfr Colan, y Gyfraith Gymreig yn ol Hanner Cyntaf Llawysgrif Peniarth 30*, University of Wales Press, 1963. (『コラン本』)
- [32] Jenkins, Dafydd (ed.): *Damweiniau Colan, Llyfr y Damweiniau yn ol Llawysgrif Peniarth 30*, Cymdeithas Lyfrau Ceredigion Gyf, 1973. (『コラン本補遺』)
- [33] Fletcher, Ian F. (trans.): *Latin Redaction A of the Law of Hywel*, University of Wales Press, 1986. (『ラテン語 A 版』)
- [34] Richards, Melville (trans.): *The Law of Hywel Dda (The Book of Blegywryd)*, Liverpool University Press, 1954. (『ブレギウリッド本』)

- [35] Jenkins, Dafydd (ed., trans.): *The Law of Hywel Dda, Law Texts from Medieval Wales*, Gomer Press, 1986. (「イオルウエルス本」)

II 研究文献

- [36] Babcock, Robert Sherburne: Rule and Society in South-West Wales, 1079~1197, 1992, Doctorial Dissertation submitted to University of California, Santa Barbara.
- [37] Bartlett, Robert: *Gerald of Wales, 1146~1223*, Clarendon Press, 1982.
- [38] Bartlett, Robert: Heartland and Border, the Mental and Physical Geography of Medieval Europe. (in [57]).
- [39] Charles-Edwards, T. M. : *Wales and the Britons, 350~1064*, Oxford University Press, 2013.
- [40] Davies, J. Conway: Giraldus Cambrensis and Powys, *Montgomeryshire Collections*, vol. 49, 1945/46.
- [41] Davies, J. Reuben: Aspects of Church Reform in Wales, c.1093~c.1223, *Anglo-Norman Studies*, vol. 30, 2007.
- [42] Davies, R. R. : *Conquest, Coexistence, and Change. Wales 1063~1415*. University of Wales Press, 1987.
- [43] Edward, Fiona & Russell, Paul (eds.): *Tome, Studies in Medieval Celtic History and Law, in honour of Thomas Charles-Edwards*, Boydell Press, 2011.
- [44] Evans, J. Wyn & Wooding, Jonathan M. (eds.): *St. David of Wales, Cult, Church and Nation*, Boydell Press, 2007.
- [45] Holmes, Urban T. : The Kambriae Descriptio of Gerald the Welshman, *Medievalia et Humanistica*, new series, vol. I, 1970.
- [46] Hughes, Herbert: Giraldus de Barri: An Early Ambassador for Wales, *Brycheihiog*, vol. XXXVIII, 2006.
- [47] Hurlock, Kathryn: *Wales and the Crusades, c 1095~1291*, University of Wales Press, 2011.
- [48] Jones, Thomas: *Gerallt Gymro, Gerald The Welshman*, University of Wales Press, 1947.
- [49] Jones, Thomas: Gerald the Welshman's "Itinerary through Wales" and "Description of Wales", *The National Library of Wales Journal*, vol. VI, no. 3, 1950.
- [50] King, David & Kenyon, John: The Castles of Pembrokeshire. (in [70]).
- [51] Lieberman, Max: *The March of Wales, 1067~1300, A Borderland of Medieval Britain*, University of Wales Press, 2008.
- [52] Lloyd, John Edward: *A History of Wales, from the Earliest Times to the Edwardian Conquest*, 2vols., Longmans, Green, 1912.
- [53] Miles, John: *Gerald of Wales, Giraldus Cambrensis*, Gomer Press, 1974.
- [54] Owen, Henry: *Gerald the Welshman*, David Nutt, 1904.
- [55] Owen, W. Jones & Walker, David (eds.): *Links with the Past, Swansea and Brecon Historical Essays*, Christopher Davies, 1974.
- [56] Pryce, Huw: In Search of Medieval Society: Deheubarth in the Writings of Gerald of Wales, *The Welsh History Review*, vol. 13, no. 3, 1987.
- [57] Pryce, H. & Watts, J. (eds.): *Power and Identity in the Middle Ages, Essays in Memory of Rees Davies*, Oxford University Press, 2007.
- [58] Pryce, Huw: Gerald of Wales and the Descriptio Kambriae. (in [43])
- [59] Rees, J. F. : *Studies in Welsh History, Collected Papers, Lectures, and Reviews*, University of

- Wales Press, 1965.
- [60] Rhys, John & Brynmor-Jones, David: *The Welsh People, Chapters on their Origin, History and Laws, Language, Literature and Characteristics*, Haskell House Publishers, 1906.
- [61] Richter, Michael: *Giraldus Cambrensis, the Growth of the Welsh Nation*, Aberystwyth, 1972.
- [62] Richter, Michael: Gerald of Wales: A Reassessment on the 750 th Anniversary of his Death, *Traditio*, vol.29, 1973.
- [63] Turvey, Roger: *The Lord Rhys, Prince of Deheubarth*, Gomer, 1997.
- [64] Turvey, Roger: *The Welsh Princes, 1063~1283*, Longman, 2002.
- [65] Wada, Yoko: Gerald on Gerald, Self-Presentation by Giraldus Cambrensis, *Anglo-Norman Studies*, vol. 20, 1998.
- [66] Walker, David: Gerald of Wales, Archdeacon of Brecon. (in [55])
- [67] Walker, David (ed.): *A History of the Church in Wales*, Church in Wales Publications, 1976.  
(和訳書 [80])
- [68] Walker, David: Gerald of Wales, *Brycheiniog*, vol. XVIII, 1978-79.
- [69] Walker, R. F. (ed.): Pembrokeshire County History, vol. II, Pembrokeshire Historical Society, 2002.
- [70] Walker, R. F.: The Earls of Pembrokeshire, 1138~1379. (in [70]).
- [71] Williams, A. H.: *An Introduction to the History of Wales*, 2vols., University of Wales Press, 1941 & 1948.
- [72] Williams, C. H.: Giraldus Cambrensis and Wales, *Journal of the Historical society of the Church in Wales*, no. 2, 1947.
- [73] 有光秀行『中世ブリテン諸島史研究－ネイション意識の諸相』, 刀水書房, 2013年。
- [74] D. ウォーカー (編) (木下智雄 (訳))『ウェールズ教会史』, 教文館, 2009年。
- [75] 永井一郎「ノルマン侵入後のウェールズ－独立をかけた戦い」(青山吉信 編著『世界歴史大系 イギリス史I 先史～中世』, 山川出版社, 1991年)。
- [76] 永井一郎「『ウェールズ案内』におけるギラルドゥス・カンブレシスの二元性」, 『国学院経済学』第57巻3・4号, 2009年。
- [77] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレシスと12世紀南ウェールズの政治世界 (I), (II)」『国学院経済学』第59巻1号, 2010年, 第59巻2号, 2011年。
- [78] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレシスの自己認識とウェールズ評価 (I), (II)」『国学院経済学』第59巻3・4号, 2011年, 第60巻2号, 2012年。
- [79] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレシスのキャリア・デザイン (I), (II)」『国学院経済学』第62巻2号, 2014年, 3・4号, 2014年。
- [80] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレシスと『セント・デイヴィズ問題』 (I), (II), (III)」『国学院経済学』第63巻1号, 2014年, 第63巻2号, 第64巻1号, 2015年。
- [81] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレシスと『プレコン大助祭問題』 (I), (II)」, 『国学院経済学』第64巻2号, 2015年, 第64巻3号, 2016年。

### III 辞典

- [82] Bartrum, P. C. (ed.): *A Welsh Classical Dictionary, People in History and Legend up to about A.D.1000*. National Library of Wales, 1993.

- [83] Stephens, M. (ed.): *The New Companion to the Literature of Wales*, University of Wales Press, 1998.
- [84] *The Dictionary of Welsh Biography down to 1940*, The Honourable Society of Cymmrodorion, 1959.
- [85] *The Welsh Academy Encyclopedia of Wales*, University of Wales Press, 2008.
- [86] *Geiriadur Pryfysgol Cymru, A Dictionary of the Welsh Language*, University of Wales Press, 1950~2002.
- [87] *Dictionary of Medieval Latin from British Sources*, The British Academy, Oxford University Press, 1975~2013.
- [88] *Handbook of British Chronology*, Royal Historical Society, 2nd ed. 1961.